

## めげずに訴えつづけよ

ルカ 18章 1-8節

イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。「ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた。ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と言っていた。裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。しかし、その後に考えた。

『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わすにちがいない。』」それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあるだろうか。言うておくと、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

### 説教

ルカの18章は信仰についての教えが、5つのたとえで示されます。

- ◆「やもめと裁判官」のたとえ (18:1-)
- ◆「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえ (18:9-)
- ◆子供を祝福する (18:15-)
- ◆金持ちの議員 (18:18-)
- ◆エリコの近くで盲人をいやす (18:35-)

きょうのたとえはその中の一番目です。でも一番わかりづらい箇所です。ここをたとえ話抜きで読んでみるとこの「わかりづらさ」がはっきりしてきます。たとえの中身を抜いてみると、「気を落とさず絶えず祈りなさい、神は

速やかに裁いてくださる」となります。この結論と「たとえ」がかみ合いません。たとえの内容はこうなっています。

「神を畏れず、人を人とも思わない」裁判官でもしつこく訴えにいけば、やもめの訴えでも聞きいられる。この裁判官は「すみやか」に裁くどころか、「しぶしぶ」うるさくてかなわないから裁くといっています。結論では「すみやか」とってなっていますが、たとえでは「しぶしぶ」となります。ぜんぜんかみ合いません。

イエスのことばとして伝わった「たとえ話」の内容が福音書が作成された頃には誰もよくわからなくなっていた？ だからこのような辻褄があわない話となって記録されたんじゃないかという解釈があります。18章に記されたほかのたとえ話は違和感を感じますが、イエスのことばで説明をきくと、なるほどと納得できます。しかし、この「やもめと裁判官」のたとえは違和感が残り、なかなか理解ができません。そこで二つほど補助線を引いてみます。

(1) 『天使にラブ・ソングを…』(1992年アメリカ映画)という修道院を舞台にしたミュージカル仕立てのコメディ映画があります。その中のシーンに修道女たちが飛行士を押し倒してタダで飛行機に乗せてもらうというドタバタの一幕があります。

この祈りによる「押し倒し」が一点目。

(2) 年をとるとなにをするにもおっくうになる、だから年寄りに頼みごとがあったらしつこく何度でも頼まないとやってくれないよ、というエッセイを読みました。(『老いの越え方』吉本隆明 朝日文庫) 自分も若いときに老教授に就職をたのんだことがあって、その頼みは聞いてもらったのだが、そのあとその教授から足が遠のいてしまった。たまたま教授にあったときにお前は頼みごとがあるときにだけ顔をだして、と小言をいわれたことがある、と続いていました。

「しつこく頼め」というのが二点目。

「拝み倒し」「しつこく頼め」にしろ一種の世間知、世渡りの知恵みたいなものですが、深い人間洞察があります。

いくら悪くても裁判官は強力な権力者です。そういう人に頼みごとをするなら「しつこさ」が決め手になる、この「やもめと裁判官」のたとえをこのように「しつこさ」「しぶしぶ」の目線で理解することは月並みです。でもイエスが弟子たちに教えたかったことはこの「月並み」な祈り、気を落とさずに絶えず祈る（ルカ18:1）ことでした。凡庸さのなかに信仰の極意があることです。

イエスの母マリアはイエスのことばを聞いてよくわからないときでも深く胸にしまっておいた、と伝えられています。イエスのたとえが奇抜でヘンに思えることがあります。しかし逆にヘンで奇抜だからこそ読んだ人の心に残ります。きょうのみことばが一人ひとりのところに福音として深く刻まれますように。

-----